国冬本『源氏物語』の「柏木」と「鈴虫」の変体仮名の運用

竹部歩美

『国際関係・比較文化研究』（静岡県立大学国際関係学部）
第16巻第２号（2018年３月）抜刷

【論文】

国冬本『源氏物語』の「柏木」と「鈴虫」の変体仮名の運用

竹部歩美

はじめに

本稿は、天理大学附属天理図書館蔵伝津守国冬筆『源氏物語』（以下、国冬本）の「柏木」と「鈴虫」を対象に、その仮名表記についての考察を行うものである。

国冬本は、これまでに「桐壺」から「胡蝶」までの翻刻がなされており[1]、また、『源氏物語別本集成』[2]における他の写本と校合から国冬本54冊の本文の大略を知ることができるが、あらためて国冬本の写本にあたってその本文を再確認していくと、そこに使用されている、ある変体仮名に、運用規則性があることに気付く。

そこで、本稿は、試みに、国冬本の、本文の脱落がなく、また考察するに足る用例の採取できる「柏木」と「鈴虫」を考察対象として、ここに使用されている変体仮名の運用の規則性について検討する。

資料には天理大学附属天理図書館蔵伝津守国冬筆本を使用する。用例は仮名の字母で表記し、改行箇所は／で示す。また、私に表記を改めた校訂本文を併記する。

一、国冬本について

『天理図書館稀書目録和漢書之部第三』[3]には、国冬本について、「源氏物語　寫　五十四冊　二三二〇」、「混合本　鎌倉時代末期至室町時代寄合書　各冊に古筆極札を貼附す」とある。鎌倉時代末期書写の12冊と室町時代に14人の手によって書写された42冊から成るこの写本は、鎌倉時代末期書写12冊の書写者が津守国冬―文永七（一二七〇）年～元応二（一三二〇）年、摂津住吉神社神主[4]―と伝わる

ところから、国冬本と呼ばれている[5]。津守国冬書写の12冊とは、桐壺・帚木（脱落と錯簡あり）・賢木・朝顔（錯簡あり）・少女（脱落と錯簡あり）・玉鬘（脱落と錯簡あり）・若菜上・柏木・鈴虫（錯簡あり）・夕霧（脱落あり）・匂宮（内容は匂宮ではなく夕霧の脱落部分）・竹河（脱落あり）である[6]。この12冊のうち、「鈴虫」以外の11冊については『源氏物語大成校異篇』（以下、『大成』）に本文の異同が収録されており[7]、「若菜上」は青表紙本に、その他は別本として分類されている。国冬本の本文には他の写本には見られない異同が見られることがある[8]。殊に、「鈴虫」には長大で特異な異同のあることが知られており[9]、その異同の中には語彙や文意が不明確な箇所もあってテキストとして成立しない箇所もある。しかしながら、特に、その「鈴虫」を含む鎌倉時代末期書写とされる12冊は、書写年代が鎌倉時代を遡ることはないとされる『源氏物語』の写本なかでも古いものの一つであるという点で軽視することのできないものであるということは、先学諸氏の指摘するところである。また、国冬本の本文は、平安時代末期に成った『源氏物語』の最古の写本とされる国宝『源氏物語絵巻』の「詞書」[10]と「本文系統の最も近いと見られる」[11]点があると指摘されているものでもある。この点においても、国冬本は重要な『源氏物語』写本の一つであると言えよう。

二、「柏木」と「鈴虫」にある文字の種類

国冬本の「柏木」は975行、「鈴虫」は418行から成る。判読可能な文字は、補入と判読可能な見せ消ちも含め、漢字1865（柏木1310・鈴虫555）、反復記号479（柏木331・鈴虫148）、仮名22031（柏木15388・鈴虫6643）である[12]。

資料中に使用されている漢字を使用頻度の高い順に示すと次のようになる。

給御心人思侍事宮中世色君身物気大見月女将所条有也日殿六方一申院本五丁弁右花十仏又秋恋衛我経三七従督二返房木夜猶門夏賀具権言故国山四春上神水数声前少袖内入年念納百品夫文辺北目野連露

使用される反復記号は、「〳〵」「ゝ」「〻」の三種である。変体仮名の種類と使用頻度は【表1―1】【表1―2】のとおりである。なお、字母が同一でありながらも崩し方が異なることがあるが、本稿では、試みに、現行の平仮名の字母についてのみ、現行の平仮名の字形に近いか漢字字形に近いか―例えば字母が「於」の仮名が「お」に近いか「於」に近いか―を恣意的に区別する。本稿で挙げる用例の仮名字母表記はこれに従ってのものである。

【表１－１】「柏木」の変体仮名の種類と使用頻度

ン	ワ		ラ		ヤ	マ				ハ					ナ			タ			サ		カ				ア	
无	王	和		羅	ら	也		満	万	末	葉	盤	者	八	波	那	奈		堂	多	太			左		可	加		阿	安
ん		わ				や				ま					は		奈	な			た			さ			加	か		あ
172	45	40		13	348	210		3	3	378	1	4	90	452	88	41	69	578	70	415	2			328		750	21	32	1	255
	ヰ		リ			ミ					ヒ					ニ			チ			シ					キ		イ
		為	里	り		身	見	三	美			日	飛	比		耳	尓	仁			知		志	之			幾		以
		ゐ		利	り				み					ひ				に			ち			し			幾	き	以	い
		16	295	7	214		4	15	78	166		16	5	255		5	551	49			170		25	818			6	498	1	421
			ル		ユ	ム					フ					ヌ			ツ			ス					ク		ウ
			流	る	由				武			布	婦	不			怒	奴		川		春	須	寿	寸		久		宇	
				留	る	ゆ				む				ふ				ぬ		川	つ				す		久	く	宇	う
			16	17	381	64				61		2	4	119			1	87		118	195	9	46	157	32		2	1	397	1	308
	ヱ		レ			メ					ヘ					ネ			テ			セ					ケ		エ
衛	恵	連	れ					免	女				邊	部	年	祢			帝	天					世	個	気	遣	計		衣
	ゑ		禮	れ					め					へ		祢	ね			て					せ				け		え
1	20	104	14	175				20	133				1	202	1	1	45		6	486					86	2	24	212	43		204
	ヲ		ロ		ヨ	モ					ホ					ノ			ト			ソ					コ		オ
越	遠		路	呂	与		毛				保			本	能	乃			登	止					曽			古	己		於
	を			ろ	よ		毛		も		ほ					乃	の			と					そ				こ	於	お
187	66		11	94	165		4	2	436		91	145	6	10	551				3	867					147			77	364	14	325

【表１―２】「鈴虫」の変体仮名の種類と使用頻度

ン	ワ		ラ		ヤ	マ				ハ					ナ			タ			サ		カ				ア	
无	王	和		羅	良	也		満	万	末	盤	者	八	波		那	奈		堂	多	太			左		可	加			安
ん		わ			ら	や				ま				は			奈	な			た			さ			加	か		あ
50	11	20		6	128	81		3	4	185	1	115	114	37		33	1	261	10	209	5			151		294	15	48		110
	ヰ		リ			ミ					ヒ					ニ			チ			シ					キ		イ
井	為	里	り			身	見	三	美			日		比		耳	尓	仁			知		志	之	起	支	幾			以
	ゐ		利	り					み					ひ				に			ち			し			幾	き		い
3	11	82	3	136		5	6	15	48			11		115		10	242	19			70		24	317	20	33	5	155		164
			ル		ユ	ム					フ					ヌ			ツ			ス					ク		ウ
			流	留	由			舞	武			布	婦	不			怒	奴	徒	川		春	須	寿	寸					宇
				る	ゆ				む					ふ				ぬ		川	つ				す				く		う
			31	138	21			1	44			1	5	72			1	32	1	46	90	4	12	158	28				102		152
	ヱ		レ			メ					ヘ					ネ			テ			セ					ケ		エ
	恵	連	礼					免	女				遍	部		年	祢			帝	天				世	個	気	遣	計		衣
	ゑ		禮	れ					め					へ			祢	ね			て				せ				け		え
	6	58	6	62				4	52				1	131		5	3	17		6	197				73	4	25	47	25		55
	ヲ		ロ		ヨ	モ					ホ					ノ			ト			ソ					コ		オ
越	遠		路	呂	与		母	毛			保			本		能	乃		登	止			楚	曽			古	己		於
	を			ろ	よ			毛	も		ほ						乃	の		と				そ				こ	於	お
28	94		20	18	70		1	24	162		42	47				8	8	291		1	334			2	74			47	150	8	112

三、仮名表記の運用

【表１―１】【表１―２】から、国冬本「柏木」「鈴虫」では現行の平仮名の字母が多用される傾向のあることがわかり、カ・ケ・ス・タ・ニ・ハやリ・レ・ヲでは現行の平仮名字母以外の字母が多用されていることがわかる。また、現行の平仮名字母のうち、イ・ウ・オ・カ・キ・ク・ツ・ナ・ネ・ノ・モ・リ・ル・レに字形の相違が見られ、いずれも、現行の平仮名に近い字形が多用されており、漢字字形に近いものは少ないことがわかる。

そして、その変体仮名には、その運用法に一定の傾向が見られるものがある。

三・一、行頭あるいは行末に使用される仮名

写本の行頭・行末に着目してみると、使用頻度の低い「登」「耳」「乃」「盤」「羅」「利」「留」に、行頭、あるいは、行末に集中的に使用される傾向が見られる。

「利」はすべて行頭にのみ用いられている。

〇おとこきみな／利遣りときゝ給尓

〈柏木、八ウ⑨〉

（「男君なりけり。」と聞きたまふに、…）

○をこなひよ／利‖本可尓このよ乃いとな三
〈鈴虫、二ォ⑩〉
（行ひよりほかにこの世のいとなみ…）

「羅」は、19例（柏木13・鈴虫6）のうち15例（柏木10・鈴虫5）が行頭に見られる。この15例は、すべて、ラを含む単語中で改行が起こり、次行の行頭にラが送られたものである。

○ち可き御中／羅‖ひ尓て〈柏木、三六ォ④〉
（近き御仲らひにて、…）
○心八ありな可／羅‖毛のさ八可し起やう尓
〈鈴虫、一八ウ④〉
（心はありながら、もの騒がしきやうに、…）

「留」は「柏木」にのみ見られるものであるが、17例中9例が行頭に用いられている。

○う以〳〵しき可多をはさ／留‖もの尓てあやしくなつ可しうなさ気八み／多るひと尓そものし給遣れ八さもあるま／しきおほや遣人女く王んなとのとしへ多／留‖もこひなき可なし可る〈柏木、四四ウ⑦・⑩〉
（うひうひしき方をばさるものにて、…女官などの、年経たるも、恋ひ泣き、悲しがる。）

「耳」は15例（柏木5・鈴虫10）のうち9例（柏木4・鈴虫5）が行頭での使用である。

○古のうら事や奈可く加多三／耳‖のこらん
〈柏木、一三ウ②〉
（このうら事や、長くかたみに残らん。）
○へ多て心あるむし／耳‖なむ〈鈴虫、五ウ⑥〉
（隔て心ある虫になむ、…）

「乃」は行頭にも行末にも見られる。18例（柏木10・鈴虫8）のうち7例（柏木5・鈴虫2）が行頭に用いられており、4例（柏木2・鈴虫2）が行末に用いられている。

○おとゝ／乃‖いてゐの可多尓〈柏木、三九ォ②〉
（おとどの出居の方に…）
○多ゝなき人／乃‖御あ里さまの〈鈴虫、一七ウ⑥〉
（ただ、亡き人の御有様の…）
○めしつき所乃‖／な可の事とん〈柏木、九ウ⑧〉
（召次所の中のことども…）
○者那乃‖／さまなとなつ可しう〈鈴虫、一ォ⑥〉
（花のさまなど、なつかしう…）

「登」は、「柏木」の3例が行頭と行末に用いられている。

○遣ふりくら邊尓／登‖ある越〈柏木、七ォ⑥〉
（「…煙くらべに」とあるを、…）
○加くよ八り多る人の可きり／登‖て〈柏木、一五ォ④〉
（かく弱りたる人の、限りとて…）
○さま〳〵ひき登‖／めらるゝ〈柏木、二三ォ③〉
（さまざまひきとめらるる…）

「盤」は行末に用いられることが多く、「柏木」の4例中3例と「鈴虫」の1例が行末に使用されている。

○あま宮盤／おほ遣なき心もう多て於ほいて

〈柏木、二六ウ⑥〉

（尼宮は、おほけなき心もうたて思いて、…）

○な尓ことにつ遣て可盤／御心尓ま可せ給

〈鈴虫、一六ウ⑦〉

（何事につけてかは御心にまかせたまふ、…）

このように、使用頻度の低い「登」「耳」「乃」「盤」「羅」「利」「留」は行内での使用位置が限定的である。

三・二、自立語語頭に使用される仮名

「志」は中世以降に自立語の語頭で用いられるとされている仮名であるが[13]、すぐ後に述べるように、資料中の「志」にもこれが当てはまる。そこで、資料中の「志」以外の仮名についても自立語語頭の表記の傾向の有無を見ると、「す」「堂」「奈」「毛」にその傾向が見出される。なお、以下では接頭辞「御」を伴う場合も自立語語頭として扱うこととする。

さて、「志」は49例（柏木25・鈴虫24）のうち46例（柏木23・鈴虫23）が自立語の表記に使用され、このうち31例（柏木16・鈴虫15）が語頭のシの表記に用いられている。「志」の六割以上が語頭で使用されているのである。また、複合語の後項の語頭のシを「志」で表記した「人志連〔人知れ（ず）〕」「うち志のひ〔うち忍び〕」「お本志志る〔おぼし知る〕」の3例もある。自立語語頭を「し」で表記する例は114例（柏木85・鈴虫29）あるものの、「し」全体の一割にとどまることからも、「志」の語頭での使用傾向の高さが伺える。

○あつ遣おき堂て／ま川る志るし尓は

〈柏木、一五ウ⑥〉

（預け置きたてまつるしるしには…）

○あをき志ろ／きむらさ起の者ち寿をとゝのへ

〈鈴虫、一ウ⑪〉

（青き白き紫の蓮を整へ、…）

○本と遣の御志つらひを見や里／給尓も

〈鈴虫、八オ①〉

（佛の御しつらひを見やりたまふにも、…）

「す」は60例（柏木32・鈴虫28）のうち50例（柏木28・鈴虫23）が自立語のスの音節を表すものであり、「す」の六割を占める35例（柏木18・鈴虫17）が語頭のスの表記に用いられている[14]。また、「いとひすて〔厭ひ捨て〕」「うちすて〔うち捨て〕」「おほしすて〔おぼし捨て〕」「と越りすき〔通り過ぎ〕」「ふ里すて〔ふり捨て〕」「ふ里すて可多支〔ふり捨てがたき〕」「ゆくすゑ〔行く末〕」のように複合語の後項要素の語頭のスの表記例も9例（柏木5・鈴虫4）ある。「春」が自立語語頭に用いられるもあるが、4例（柏木3・鈴虫1）である。「寿」にもそれが72例（柏木46・鈴虫26）あるが、「寿」全体の二割程度である。また、「寿」が複合語の後項要素の語頭のスに使用した例は1例（於もひ寿て

〔思ひ捨て〕）のみである。「須」には自立語語頭の表記例がない。よって「す」が自立語語頭のスの表記に使用される傾向は顕著だと言える。

○御く志／のすゑのところをき越〈柏木、二八オ①〉

（御髪の末の所狭きを…）

○あ者れすくな可らす〈鈴虫、一五オ⑪〉

（あはれ少なからず。）

「堂」は80例（柏木70・鈴虫10）あり、74例（柏木64・鈴虫10）が自立語中の用例である。このうち語頭のタの表記例が66例（柏木56・鈴虫10）であり、「堂」全体の八割が自立語語頭のタの表記に使用されている。なお、複合語後項の語頭のタの表記例も「いて堂川〔出で立つ〕」「お本し堂川〔おぼし立つ〕」の2例がある。一方、「多」が自立語語頭のタを表記する例は137（柏木88・鈴虫49）であり、「多」の二割程度である。よって、「堂」は自立語語頭のタの表記に使用する傾向があると言える。

○む可しよ里堂／え寿みゆる越里〳〵

〈柏木、三三オ⑨〉

（昔より、絶えず見ゆる折々、…）

○者可〳〵しきさ／まの毛の八堂てま川里給

〈鈴虫、一一オ⑨〉

（はかばかしきさまのものは奉りたまふ。）

「奈」は70例（柏木69・鈴虫1）のうち40例（柏木39・鈴虫1）が自立語中のナの表記に使用されており29例（柏木28・鈴虫1）が語頭のナの表記に用いられている。また、複合動詞「おぼし嘆く」の後項要素の語頭のナの表記例（「おほし奈気く」「おほし奈遣く」）がある。また、「奈」には、ナシ〔無し〕が付属して一語化したとされる形容詞のナの音節を「奈」で表記する「可き里奈く〔限りなく〕」「かひ奈く〔甲斐なく〕」「そこ八可と奈く〔そこはかとなく〕」「多のもし遣奈く〔頼もしげなく〕」「つね奈く〔常なく〕」「つれ奈く「つれなく〕」「者可奈く〔はかなく〕」「やむ事奈く〔やむごとなく〕」がある。これらを複合語の後項の語頭音節としてとらえ、語頭に準ずるものとして扱うならば、「奈」が自立語語頭のナを表記する例は40例となり、語中の「奈」の音節を表記する例は「者奈連可多く〔離れがたく〕」のみとなる。

○世尓奈可／羅えん事八と〈柏木、五ウ⑩〉

（「世にながらへんことは。」と…）

○へ多て奈く者ち寿のやと越ちき里ても／君可古〻路の寿ましとすら舞〈鈴虫、八オ⑪〉

（隔てなく蓮の宿を契りても君が心の住まじとすらむ）

これに対し、「な」は自立語語頭の表記例が267例（柏木198・鈴虫69）あるものの、語中にも280例（柏木184・96）の使用例があり、また、「那」の自立語語頭での使用例は7例（柏木2・鈴虫5）とわずかである。このことから、「奈」は語頭での使用傾向が高いと言える(15)。

「毛」は26例（柏木2・鈴虫24）中17例（柏木1・鈴虫

16）が自立語のモの表記に使用され、このうち14例（柏木1・鈴虫13例）が語頭のモの音節の表記に使用されている。「も」が自立語語頭のモを表記する例も89例（柏木75・鈴虫14）ある。しかし、「も」は付属語の表記に使用する傾向が顕著であり、全体の六割以上を占める390例（柏木288・鈴虫102）は係助詞モをはじめとする付属語の表記に使用されている。

○い多うも毛て者やし給須〈柏木、一〇オ⑧〉
（いたうももてはやしたまはず、…）
○ふ可くも毛の見給者ぬなめり可しと
〈鈴虫、一七オ⑥〉
（「深くももの見たまはぬなめりかし。」と、…）

以上のように、「志」「す」「堂」「奈」「毛」は自立語語頭の表記に使用される傾向が顕著に認められる。

三・三、「は」「八」「者」「盤」「葉」の使用傾向

ハ（バ）の仮名には資料中では「は」「者」「八」「盤」「葉」の五文字が用いられており、この五文字は/Fa/(16)・/wa/・/ba/の音韻を表し得る。この五つの仮名が/Fa/・/wa/・/ba/のいずれを表すかをまとめたのが【表2―1】【表2―2】である。なお、「御」「もの」などの接頭辞を冠する場合と、複合動詞の後項の語頭についても自立語語頭として扱うこととする。

【表2―1】【表2―2】から、全体的な傾向として、「八」の多用傾向があると指摘できる。ただし、「柏木」では「八」を多用し、「鈴虫」では「八」と「者」とを使用する傾向があって、見せる傾向は異なる。

音韻に着目すると次のことが言える。

/Fa/の表記には「者」用いる傾向があり、殊に自立語語頭の/Fa/を表す傾向が顕著である(17)。自立語の語中の/Fa/を表す「者」もあるものの、これらはすべて「と里者なち〔とり放ち〕」「加さり者て〔飾りはて〕」「おもひ者な連〔思ひ離れ〕」のように、複合語の後項の語頭音節の/Fa/を表す「者」である。これらは自立語語頭の/Fa/に準ずるものと考えることもできよう。「八」も語頭の/Fa/を表記する例があるが、「者」に比して用例は少なく、また、「八」は/Fa/以外の音韻を表記する用例に偏る。よって、語頭の/Fa/の表記には「者」を使用する傾向があると言える。

○宮須所も寿こし者那こゑ尓な里給て
〈柏木、三五ウ④〉
（御息所も少し鼻声になりたまひて、…）
○いと者那や可なるそら／越な可め給て
〈鈴虫、六オ⑤〉
（いとはなやかなる空を眺めたまひて、…）

/wa/は付属語の表記に「八」を用いる傾向が顕著である。なお、その付属語とは接続助詞ハ（柏木2例）と係助詞ハである。自立語の語中の/wa/の表記には「者」「八」が用いられる傾向がある。ただし、「柏木」では「八」が多用され、

【表２－１】「柏木」のハの仮名の使い分け

	葉			盤			者			八			は				
合計	付属語	自立語		付属語	自立語		付属語	自立語		付属語	自立語		付属語	自立語			
		語中	語頭		語中	語頭		語中	語頭		語中	語頭		語中	語頭		
65	0	0	0	0	0	0	0	10	32	0	9	15	0	0	0		/Fa/
		0			0			42			24			0		小計	
	0			24			41			24			0			計	
402	1	語中	語頭	3	語中	語頭	0	語中	語頭	152	語中	語頭	47	語中	語頭		
		0	0		0	0		34	0		158	0		6	1		/wa/
		0			0			34			158			7		小計	
	1			3			34			310			54			計	
164	0	語中	語頭	1	語中	語頭	1	語中	語頭	100	語中	語頭	34	語中	語頭		
		0	0		0	0		10	0		18	0		0	0		/ba/
		0			0			10			18			0		小計	
	0			1			11			118			34			計	
4	0			4			3			0			0			計	不詳
635	1			4			90			452			88			合計	

【表２－２】「鈴虫」のハの仮名の使い分け

	葉			盤			者			八			は				
合計	付属語	自立語		付属語	自立語		付属語	自立語		付属語	自立語		付属語	自立語			
		語中	語頭		語中	語頭		語中	語頭		語中	語頭		語中	語頭		
51	0	0	0	0	0	0	0	12	37	0	1	1	0	0	0		/Fa/
		0			0			49			2			0		小計	
	0			0			49			2			0			計	
158	0	語中	語頭	1	語中	語頭	2	語中	語頭	49	語中	語頭	21	語中	語頭		
		0	0		0	0		42	0		39	0		4	0		/wa/
		0			0			42			39			4		小計	
	0			1			44			88			25			計	
48	0	語中	語頭	0	語中	語頭	6	語中	語頭	20	語中	語頭	11	語中	語頭		
		0	0		0	0		9	0		1	0		1	0		/ba/
		0			0			9			1			1		小計	
	0			0			15			21			12			計	
9	0			0			6			3			0			計	不詳
266	0			1			114			114			37			合計	

「鈴虫」では「者」「八」の両方を用いるという異なる傾向が見られる。

○おとゝ八‖さもし里給八‖て

〈柏木、五オ④〉

（おとどはさも知りたまはで、…）

○さ八可りよ者り給える人の

〈柏木、一二ウ⑦〉

（さばかり弱りたまへる人の、…）

○あ支のよ能むしのこゑいつと那／くあ者連尓き古　え多る中尓ま川む／しこそ八‖すくれて心尓く遣禮

〈鈴虫、五オ⑨⑩〉

（「秋の夜の虫の声、いっとなくあはれに聞こえたるなかに、松虫こそはすぐれて心憎けれ。…」）

○うる八し可るへ支おり／ふし八‖

〈鈴虫、一五オ③〉

（うるはしかるべき折節は、…）

/ba/では、「は」と「八」を付属語―接続助詞バ・係助詞ハの連濁、副助詞バカリ・終助詞バヤ―の表記に用いる傾向がある。「八」はこれらの付属語のすべての表記に用いられており、「は」は接続助詞バと係助詞ハの連濁の表記にのみ用いられている。

○み多てま川ら／まし可八‖〈柏木、八ウ③〉
（見たてまつらましかば、…）
○可くもおほし多ち尓／しみちな連は‖
〈鈴虫、三オ⑨〉
（かくも思したちにし道なれば、…）
○御あ者連八‖可里越わ春／連ぬこと尓て楚
〈鈴虫、一七ウ⑨〉
（御あはればかりを別れぬことにてぞ、…）
○おほ可多のあ者れ者‖可り八志ら留れ／と
〈柏木、三ウ⑧〉
（大方のあはればかりは知らるれど、…）
○さ者れ可ゝるついて尓し／な八‖やとおほ須
〈柏木、一〇ウ②〉
（「さはれ、かかるついでに死なばや。」）

字母に着目すると次のことを指摘することができる。

「は」は付属語の表記に集中的に用いられている。その付属語とは、係助詞ハと接続助詞バである。「柏木」にみられる自立語中の/wa/のうち3例に「さるは（接続詞）」「いまは（名詞）」があり、これらは自立語＋係助詞ハが一語化したものである。「鈴虫」では自立語の語中の/ba/が1例あるが、これは「さらば（接続詞）」であり、動詞サリ＋接続助詞バからの転成である。これらのことからも、「は」は付属語の表記に用いる傾向が顕著であると言い得よう。

「八」は自立語・付属語どちらの/ba/・/wa/の表記にも用いられる。「八」が用いられる付属語は係助詞ハ・接続助詞ハ・接続助詞バ・副助詞バカリ・終助詞バヤである。ハ（バ）が関わる付属語のうち出現頻度の最多のものは係助詞ハ（284例）であるが、その表記には「八」が最も多く用いられている（206例、柏木156例・鈴虫50例）。

「者」は自立語中の音節を表記する例に集中し、付属語を表記する例が少ない。

用例数の少ない「盤」「葉」は付属語の表記にのみ用いられており、自立語に用いた例は見られない。

○可のやなき／のめ尓葉‖とあ里つること可い多る越
〈柏木、三九ウ⑥〉
（かの、「柳の目には。」と、ありつること書いたるを…）
○さるへきひとしてそうせさせ給遣れ盤‖
〈柏木、一三オ②〉
（さるべき人して奏せさせたまひければ、…）

以上のように、使用頻度の高い「は」「者」「八」の仮名については、「は」は付属語の/Fa/―係助詞ハ―と/ba/―接続助詞バ―の表記に使用し、「者」は自立語中の/Fa/の表記に使用し、「八」は自立語・付属語の/wa/と/ba/の表記に使用し、殊に「八」は係助詞ハの表記に多用するという傾向が見出される。

三・四、「ん」「む」「舞」を用いた撥音/N/の表記

撥音/N/[18]の表記には「ん」「む」[19]「舞」が用いられてい

る。「ん」の字母は「无」であるとされるが、資料中では「无」に近い字形は用いられず、現行の平仮名の「ん」の字形が用いられている。

撥音/N/を含む自立語においては、その撥音/N/は「ん」で表記されるものが大半を占める。

○おとゝも／ちゐてねんころ尓きこえ給ひ
〈柏木、一九ウ②〉
（おとど用ゐて、ねんごろに聞えたまひ、…）

○つね尓ひき給しひ王わこん／なと越も
〈柏木、三三ウ⑪〉
（常に弾きたまひし琵琶、和琴などをも…）

○あさまし／支こと尓こそあんな連と
〈鈴虫、三オ②〉
（「あさましきことにこそあんなれ。」と、…）

○かん多ちめ弁なとも〈鈴虫、一九オ①〉
（上達部、弁なども、…）

自立語中の撥音/N/を「む」で表記するものは、次のもののみである。

御４例（柏木４）、願文１例（鈴虫１）、誦ず１例（鈴虫１）、故大納言１例（鈴虫１）、やむごとなし６例（柏木５・鈴虫１）

このうち、「御（おほむ）」「やむごとなし」に「む」が用いられるのは、「おほみ」から転じたという意識や「止む事無し」の一語化であるという意識に基づくものとかと推測する。また、撥音が近接して現れる「願文」「故大納言」は、一度目の撥音を「ん」、二度目を「む」で表記しており、同音[20]が近接する場合に異なる仮名を用いようと意図する場合があったのではないかと考える。例えば、次に挙げるように、ノが近接する場合には異なる字母で表記する例があることなどからもそのように推測される。

○く王んもむ〈鈴虫、一二オ⑧〉
○故古ん大なこ／む〈鈴虫、七オ⑦⑧〉
○可遣者な禮奈んいのち乃可ひ那く〈柏木、一オ④〉
○王可世の能ちさへ思こそ〈柏木、七ウ⑨〉
○古の者る能こ路をひよ里〈鈴虫、一二ウ②〉
○こな多のひさしこ那多の寿乃こ／なと尓
〈鈴虫、一三オ⑤〉

付属語中の撥音/N/の使用状況は【表３】のようにまとめられる。表中で「不明」とした２例については次節―三で述べる。【表３】のとおり付属語においても撥音/N/の表記には「ん」が用いられ、「む」が用いられる傾向は低い。ただし、「鈴虫」の係助詞ナムに限っては「む」の使用が「ん」を上回る。

なお、「舞」は和歌の助動詞ラムの表記に用いられたものである。

○へ多て奈く者ち寿のやと越ちき里ても／君可古ゝ路の寿ましとすら舞〈鈴虫、八ウ①〉
（隔てなく蓮の宿を契りても君が心の住まじとすら

む）

【表３】付属語中の撥音/N/の表記

/N/		助詞 なむ	助詞 なんど	助動詞 む	助動詞 けむ	助動詞 べかん（撥音便）	助動詞 らむ	不明	計
ん	柏木	44	1	69	11	0	1	1	127
	鈴虫	9	0	11	1	1	2	0	24
む	柏木	2	0	5	0	0	0	1	8
	鈴虫	13	0	3	0	0	0	0	16
舞	柏木	0	0	0	0	0	0	0	0
	鈴虫	0	0	0	0	0	1	0	1

三・五、モの異体字「ん」

「ん」は、先に【表1―1】で見たように、モの異体字[21]としても使用される。この「ん（モ）」は、接続助詞ドモ・トモのモの表記に使用されることの多いことが指摘されている。また、接続助詞ドモ・トモ以外にもトとモの連続の際の「ん（モ）」のあることも指摘されている[22]。

「柏木」にのみ見られる「ん（モ）」の4例のうち1例は接続助詞トモ、2例はトとモが連続する箇所での使用例である。これに該当しないものも1例あるとはいえ、資料中においてもト＋モの連続の際に「ん（モ）」が用いられる傾向があるといえよう。

○ゆくゑなきそらの遣ふりとな里ぬとん／おもふあ多里越堂　ち八者な連し〈柏木、七ウ①〉
（行方なき空の煙となりぬとも…）

○女のらうなとそうらなひまし遣連八し可／奈とんお ほ寿尓〈柏木、四ウ⑦〉
（女の霊などぞ占ひ申しければ、「しか。」などもお ぼすに…）

○めしつき所乃／な可の事とんなとい可めしくせさせ給へ／里〈柏木、九ウ⑨〉
（召次所の中の事どもなど…）

○おのつ可らあるましきなん堂ち〈柏木、二オ⑧〉
（おのづからあるまじき名も立ち、…）

三・六、オとホの連続の表記

この「とん（モ）」のように、ある音韻とある音韻との連続を表記する際に、ある仮名とある仮名の連続が固定的に用いられるものがある。「お」「ほ」である。

「ほ」は、オにホ（ボ）が続く際に用いられる傾向が顕著である[23]。「ほ」192例（柏木145・鈴虫47例）のうち、180例（柏木136・鈴虫44）が、オホを含む自立語の表記に使用されている。オホの連続以外の場合に「ほ」が使用されるのは、ホド（程）（柏木に2例）・オモホシメス（柏木に1例）・ホトケ（仏）（鈴虫に2例）のみである。一方、オホを「お

本」と表記するものは8例（柏木5・鈴虫3）とわずかである。また、「本」にはついては、ホド〔程〕（35例（柏木29・鈴虫6）、マホシ・アラマホシ（12例（柏木7・鈴虫5））のホの表記に用いられるといった傾向を見出すことはできるものの、「お」と「ほ」ほどの顕著なものは見られない。

○大将殿のちこおひの本の可尓／おほしいてらるゝ尓八　〈柏木、二九オ⑩〉

（大将殿の稚児生ひのほのかに思し出でらるるには…）

○おほ殿尓／や可てまい里給へれ八　〈柏木、三八ウ⑩〉

（大殿にやがて参りたまへれば、…）

○おほ可多のこともみ／那人尓せさせ給へれ八　〈鈴虫、八ウ⑩〉

（大方のこともみな人にせさせたまへれば、…）

○よそ〳〵尓ては／おほつ可な可るへし　〈鈴虫、一一オ②〉

（「よそよそにてはおぼつかなかるべし。…」）

このことから、オにホが続く際、その表記には「お」「ほ」が固定的に用いられていると言える。また、「本」はオホの連続以外のホの表記に使用する傾向があると言える。

四、敬語動詞の表記

第二節に示したように、資料中で使用されている漢字では、敬語動詞タマフをし得る「給」の使用頻度がもっとも高く、敬語動詞を表し得る「思」「侍」の使用頻度も上位にあった。そこで、敬語動詞の表記に用い得る漢字「給」「思」「侍」「申」について敬語動詞の漢字・仮名の表記に注目してみると、漢字を用いて表記する傾向にある敬語動詞と、仮名のみで表記する傾向にある敬語動詞とがあることがわかる。なお、資料中には敬語動詞にはキコユ―複合語でキコユを語構成要素として持つ語を含む―もあるが、漢字「聞」が資料中には用いられておらず、よって、キコユは仮名書きの例のみであるため、本節では考察対象から除外する。

四・一、敬語動詞の漢字表記と仮名表記

敬語動詞の漢字・仮名の表記の様相は、【表4】のとおりである。なお、タマフは四段・下二段の区別はしない。また、ノタマフ・オボス・オモホスを語構成要素に持つ複合動詞は、それぞれノタマフ・オボス・オモホスの用例数に含める(24)。

さて、【表4】から、漢字「給」「侍」「申」は敬語動詞の表記に用いられるのに対し(25)、漢字「思」は敬語動詞オボス・オモホスの表記には用いられないことがわかる(26)。タマフ・ノタマフ・ウケタマハル・ハベリ・マウスは、漢字のみ、あるいは、漢字仮名交じりで表記する傾向が顕著

である。また、ノタマフ・ウケタマハルにも漢字「給」が用いられることがわかる。

【表４】敬語動詞の漢字表記と仮名表記

		柏木	鈴虫
タマフ	給（ふ）	344	148
	たま（ふ）	1	4
ノタマフ	の給（ふ）	19	4
	のたま（ふ）	0	1
ウケタマハル	うけ給は（る）	2	2
	うけたまはる	0	0
ハベリ	侍（り）	77	19
	はべ（り）	1	2
マウス	申（す）	7	0
	まう（す）	1	0
オボス	思す	0	0
	おぼ（す）	107	33
オモホス・オモホシメス	思（ほす）思ほしめす	0	0
	おもほ（す）おもほ（しめす）	1	4

○うちや寿三給えると人〳〵も申せはしかおほして
〈柏木、五オ⑤〉
（「うち休みたまへる。」と人々も申せば、しかおぼして、…）

○すゝむし八心や誦くいまめ幾／多るこそらう多う侍へ連との給へ八〈鈴虫、五ウ⑦〉
（「…鈴虫は心安く今めきたるこそらうたうはべれ。」とのたまへば、…）

○む可しの御物可多りもう／気給者りき古えさせま本しうおも日給ふる／も〈鈴虫、一五ウ⑧〉
（「昔の御物語も承り聞えさせまほしう思ひたまふるも…」）

これらに対し、敬語動詞オボス・オモホスは仮名のみで表記され、漢字表記例はない。つまり、漢字「思」は通常形のオモフの表記にのみ用いられる。そして、そのオモフ―オモフを語構成要素に持つ複合動詞も含む―は、【表５】に示すように、漢字を用いて表記される傾向にあるのである。このことから、敬語形オボス・オモホスと通常形オモフとを書写者は表記し分けているものと考えられる。通常形オモフに仮名表記例も一定数見られるのは敬語形オボス・オモホスが仮名表記であることにより、オモフは表記が漢字であっても仮名であっても敬語形ではないことを明確にすることができるためであろう。

【表５】オモフの漢字表記と仮名表記

		柏木	鈴虫
オモフ	思（ふ）	81	14
	おも（ふ）	11	19

○院尓もよろしきさま尓おほし／ゆるし多る御気色のあ里し　可八〈柏木、三六オ⑦⑧〉
（院にもよろしきさまに思し許したる御気色のありしかば）
○よひ連いの御あ／そひやあらんとおも本しやり給て
〈鈴虫、六ウ③〉
（「宵、例の御遊びやあらん。」と思ほしやりたまひて、…）
○その／堂寿遣あるへきさま尓となん思侍と
〈柏木、一四ウ⑨〉
（「…『その助けあるべきさまに。』となん、思ひはべる。…」）
○やう〳〵つもる尓なむ思日し累ことも侍／ける
〈鈴虫、一八③〉）
（「…やうやう積もるになむ思ひ知ることも侍りける。」）

なお、オボユも仮名表記例のみであり「思ゆ」のように漢字仮名交じりで表記される例はない。これは、この後述べるように、資料中ではハ行に活用する動詞の已然形活用語尾をヘではなくエと表記する場合があり、オモフの已然形にも「思え」と表記する場合があるから、オモフの已然形とオボユの已然形との混同をさけるためにオボユを仮名表記にしたのではないかと考えられる。

○可川八いとらう多く思えと〈柏木、六ウ⑨〉
（かつはいとらうたく思へど、…）
○めつらしくう連し可らましと思えと
〈柏木、八ウ③〉
（めづらしううれしからましと思へど、…）

四・二、「給へ」と「給え」

ところで、敬語動詞タマフの四段動詞已然形・命令形のタマへ、および、下二段動詞連用形のタマへの表記には、「給へ」・「給え」・「多まへ」があるのであるが、「給え」と表記する場合と、「給へ」・「多まへ」と表記する場合とには棲み分けがある。

「給え」と「給へ」の表す四段動詞・下二段動詞の別、また、四段動詞については已然形と命令形の別、さらに、已然形については下接続する付属語の別を整理したのが【表６】である。

なお、仮名のみで表記する「多まへ」は「鈴虫」に２例あり、【表６】では「給へ」の用例数に含めてある。

なお、「多まへ」は助動詞リを下接する例と、下二段動詞連用形の例が

【表６】「給へ」と「給え」

		下二段連用形	四段 命令形	已然形 不明	已然形 助詞ド	已然形 助詞バ	已然形 助動詞リ
給へ	柏木	39	7	10	0	3	13	6
給へ	鈴虫	32	3	1	0	3	1	24
給え	柏木	56	0	3	2	2	2	46
給え	鈴虫	7	0	0	0	0	0	7

それぞれ1例である。表中の「不明」とした2例については、本節―三で述べる。

【表6】に明らかなように、「柏木」と「鈴虫」では下二段動詞タマフの連用形は「給へ」で表記され、「給え」では表記されない[27]。四段動詞命令形は「給へ」で表記する傾向がある。

○い三しきこと越思ふ給へな気く心八
〈柏木、三四ウ⑥〉
（「いみじきことを思ふたまへ嘆く心は、…」）

○さま〳〵尓思日給へみ多連てなん〈鈴虫、一六オ④〉
（「…様々に思ひたまへ乱れてなん、…」）

○可連きゝ給へ奈／尓のつみとも思しらぬ尓
〈柏木、五ウ①〉
（「かれ聞きたまへ。何の罪とも思ひしらぬに、…」）

○心／多可へ春おほしとゝめて毛のをさせ給へなと
〈鈴虫、一六オ⑥〉
（「心違へず思しとどめて物をさせたまへ。」など…）

四段動詞タマフの已然形は「給え」と表記する例が多数みられ、その「給え」は、完了の助動詞リを下接する傾向が顕著である。「柏木」では「給え」の八割以上が助動詞リを下接している。「鈴虫」の「給え」7例にはすべて助動詞リが下接している。

○本の〳〵とひさしあ／かる本と尓むまれ給えり
〈柏木、八ウ⑧〉
（ほのぼのと日さし上がるほどに生まれたまへり。）

○木丁の可／多ひら越ひきあ遣給えれ八
〈柏木、二一ウ⑨〉
（几帳の帷子をひき上げたまへれば、…）

○とき〳〵八せうそこなとき古え給えり个り
〈鈴虫、四ウ⑥〉
（時々は消息など聞こえたまへりけり。）

○六多う志ゆしやうの堂免／六布可ゝせ給えり
〈鈴虫、一二オ⑤〉
（六道衆生のため六部書かせたまへり。）

これに対し四段動詞已然形の「給へ」は、「柏木」については接続助詞を下接した条件表現の表記に用いられる傾向がある。ただし、「鈴虫」では「給へ」にも助動詞リを下接する用例が多く、「給え＋助動詞リ」に用例が集中した「柏木」とは傾向が異なる。

○御木丁／越ひきや里給へ八〈柏木、二八オ③〉
（御几帳をひきやりたまへば、…）

○於／きあ可らんとし給へといとくるし遣なり
〈柏木、二二オ①〉
（起き上がらんとしたまへど、いと苦しげなり。）

しかし、「鈴虫」の「給え」も「柏木」のそれと同様、「給え＋完了の助動詞リ」の場合に見られるのであった。このことから、四段動詞タマフの已然形を「給え」と表記する傾向が顕著であると言え、かつ、助動詞リを下接する傾

向が非常に強いことは明らかであると言える。

なお、「の給ふ〔のたまふ〕」の已然形活用語尾を「え」で表記する次の2例もある。このことからも、ハ行四段活用已然形「給ふ」の活用語尾を「え」で表記する傾向の高さが伺える[28]。

○い可ゝ八きこゆへ可らんとの給え八　〈柏木、二九オ①〉

（「いかがは聞こゆべからん。」とのたまへば…）

○川くろひおきてこそとの給えと　〈柏木、一六ウ①〉

（「つくろひおきてこそ。」とのたまへど…）

四・三、「給え」に下接する「者む」「者ん」

先の【表3】と【表6】で「不明」としたものが2例あった。これは、「柏木」に見られる、「給え」にハム―「者む」「者ん」が各1例―が下接するものである。しかし、当該箇所に該当する語としてハムは考えにくく、「者む」「者ん」は誤字と考えられる。また、仮に当該箇所がタマハムであるとするならば、漢字「給」の下の仮名「え」は誤って記されたものと考えられる。いずれにせよ当該箇所は「者む」「者ん」ではテキストとしては成立しない。

当該箇所を『大成』本文に照らしてみると、それぞれは、「うちしめりおもやせ給へらむ」〈一二三一⑨〉、「いちしるきかほつきにてさしいてたまへらむ」〈一二三三⑭〉とある箇所であり、いずれも、タマへに下接しているのは完了の助動詞リの未然形ラである。

このことから、当該箇所では書写者による「ら」と「者」の仮名の混同があったものと推測できる。そして、当該箇所がラム・ランであるのが本来であるとするならば、このラは完了の助動詞リと考えることとなる。つまり、「給え」には助動詞リを下接する傾向が非常に強いということになるのである。

○とおほしめい多るさまい三しき越可多る尓／うちしめ里於もやせ給え者む於も可けの／見多てまつる心地して〈柏木、六オ⑨〉

（…と思しめいたるさまいみじきを語るに、うちしめり面痩せたまへら者む面影の、見たてまつる心地して、…）

○可うしのひ多流／事のあや尓く尓しるき可本川きの／さし　いて給え者ん可〈柏木、八ウ⑪〉

（「かう忍びたることの、あやにくにしるき顔つきのさし出でたまへら者んが…」）

まとめ

以上、国冬本の「柏木」と「鈴虫」の表記に関する考察を行った。本稿で述べたことをまとめると次のようになる。

一・国冬本の「柏木」と「鈴虫」の変体仮名の運用には規

則性のみられるものがある。

・「志」「登」「耳」「乃」「盤」「羅」「利」「留」は行頭あるいは行末に使用される傾向がある。

・「志」「す」「堂」「奈」「毛」は自立語の語頭の表記に使用される傾向がある。

・「は」は付属語の/ɸa/と/ba/、「者」は自立語の/ɸa/、八は自立語・付属語の/wa/と/ba/の表記に使用し、係助詞ハの表記には「八」を多用する傾向がある。

・撥音/N/の表記には「ん」が専ら使用され、「む」が使用される傾向は低い。

・ト＋モの連続の際にモの異体字「ん」が使用される傾向がある。

・オ＋ホの連続の際は「お」「ほ」が固定的に使用される。

二．敬語動詞ハベリ・マウス、タマフ・ノタマフ・ウケタマハルのタマの音節、動詞オモフは漢字あるいは漢字仮名交じりで表記されるが、敬語動詞オボス・オモホスは仮名で表記される。

三．四段動詞タマフの已然形を「給え」と表記する用例があり、「給え」完了の助動詞リを下接する傾向がある。

注

（1）伊藤鉄也・岡嶌偉久子（一九九六）「国冬本源氏物語1（翻刻　桐壺・帚木・空蟬）伊井春樹編『本文研究第一集』和泉書院。同（一九九八）「国冬本源氏物語2（翻刻　夕顔・若紫・末摘花）伊井春樹編『本文研究　第二集』和泉書院。同（二〇〇〇）「国冬本源氏物語3（翻刻　紅葉賀・花宴・葵）伊井春樹編『本文研究　第三集』和泉書院。同（二〇〇一）「国冬本源氏物語4（翻刻　賢木・花散里・須磨・明石）伊井春樹編『本文研究　第四集』和泉書院。同（二〇〇二）「国冬本源氏物語5（翻刻　澪標・蓬生・関屋・絵合・松風・薄雲）伊井春樹編『本文研究　第四集』和泉書院。同（二〇〇四）「国冬本源氏物語6（翻刻　朝顔・少女・玉鬘・初音・胡蝶）伊井春樹編『本文研究　第四集』和泉書院。

（2）伊井春樹・小林茂美・伊藤鉄也編（一九八九～二〇〇二）『源氏物語別本集成』一巻～一五巻、おうふう。

（3）天理図書館編（一九六〇）。

（4）上田ほか（二〇一一）。

（5）岡嶌（一九九三）。

（6）注5に同じ。

（7）『大成』には室町時代書写42冊の中からも本文の異同が採録されており、松風・若菜下・椎本・総角が河内本に、常夏・篝火・藤裏葉・紅葉賀・橋姫・宿木・東屋・浮舟・蜻蛉・手習・夢浮橋が別本として分類されている。

（8）伊藤（一九九九）、同（二〇〇一a）、越野（二〇一六）、五島（一九六八）。

（9）伊藤（二〇〇一a）、同（二〇〇〇b）、越野（二〇一六）。

(10) 中村（一九五四）、伊藤（二〇〇一）、渋谷（二〇〇七・二〇〇八）、竹部（二〇一五）。

(11) 岩下（一九七九）。同様の指摘は、中村（一九八二）、伊藤（二〇〇一b）、今西（二〇〇一）によってもなされている。

(12) 「柏木」の最終行には「南無阿弥陀佛十遍」とある。この最終行は考察対象から除外してある。

(13) 矢田（一九九五）、高田・斎藤（二〇一三）。

(14) 「鈴虫」の19例のうち次の2例は未詳の語の語頭の用例である。

○いろこと尓なるをすりせ給帝〈鈴虫、一二ウ①〉

○よう／さ里ける毛の者可なさ越い可てすくいひ／き可せんと〈鈴虫、一七ウ⑪〉

(15) 「奈」はナにクが後続する場合に、「奈く（形容詞ナシの連用形）」「奈くさ免（慰め）」「奈くく（泣く泣く）」のように用いられる傾向も見られる。「柏木」に27例、「鈴虫」の1例ある。

(16) 無声両唇摩擦音を便宜的に/F/で示す。

(17) 他の写本の調査にも同様の指摘がある。国宝『源氏物語絵巻』の「詞書」の仮名「者」も自立語語頭に用いられる傾向があるとされ（竹部二〇一五）、米国議会図書館蔵本も同様であるとの報告がある（斎藤二〇一四）。

(18) 古典文音読の際に/N/と音読するもの。

(19) /m/・/u/については、「むらさ起〔紫〕」「むま〔馬〕」「むもれ多き〔埋もれいたき〕」「すゝむし〔鈴虫〕」のように、「む」が用いられる。

(20) 願・文・権・言の韻尾は[n]である。

(21) 堀川（二〇一五）に拠る。中川（二〇〇九）では「モに置き換えられる〈ん〉」とされる。

(22) 堀川（二〇一五）。

(23) 「於ほ」「於本」は用例数から除外してある。なお、「於ほ」は4例（柏木3・鈴虫1）、「於本」は「柏木」に1例であるから、「おほ」「お本」の傾向と一致する。

(24) ここでは漢字表記か仮名表記かを問題とするため、「お」「於」の区別をせず仮名表記例として扱う。

(25) ただし、ハベリについては、国冬本の鎌倉末期書写12冊のそれが、漢字表記されるか仮名によるかは、それぞれ傾向が異なることを、中村（二〇一四）が指摘している。

(26) あくまで「オモフ」の語形が敬語形ではないということであり、敬語表現に関与しないというのではない。

(27) 国冬本で用例が皆無というわけではないようである。伊藤鉄也・岡嶌偉久子（一九九六）（注1参照）を見ると、下二段動詞タマフを「たまえ」で表記する例がある。

○心のうらみはとけなんとおもひたまえしに〈帚木、二一ウ〉

（「心の恨みはとけなむと思ひたまへしに、…」）

(28) これらを含めた、国冬本の歴史的仮名遣と仮名表記

については別稿にて述べる。

参考文献

浅川哲也・竹部歩美（二〇一四）『歴史的変化から理解する現代日本語文法』おうふう
伊藤鉄也（一九九九）「国冬本「若紫」における独自異文の考察―いわゆる青表紙本に内在する異本・異文について―」『大阪明浄女子短期大学紀要』一三（伊藤鉄也（二〇〇二）『源氏物語本文の研究』（おうふう）所収）
――（二〇〇一a）「源氏物語別本群の長文異同―国冬本「鈴虫」の場合」『国文学研究資料館紀要』二七（伊藤鉄也（二〇〇二）『源氏物語本文の研究』（おうふう）所収）
――（二〇〇一b）『『源氏物語』の異本を読む　「鈴虫」の場合』臨川書店
今西弘子（二〇〇一）「平安朝絵巻詞書の文章特性―国宝源氏物語絵巻を中心に―」『横浜市立大学紀要人文科学系列』八
岩下光雄（一九七九）『源氏物語とその周辺』伊那毎日新聞社
上田正昭・西澤潤一・平山郁夫・三浦朱門監修（二〇〇一）『日本人名大辞典』講談社
岡嶌偉久子（一九九三）「源氏物語国冬本―その書誌的総論―」『ビブリア』一〇〇号（岡嶌偉久子（二〇一〇）『源氏物語写本の書誌学的研究』（おうふう）所収）
越野優子（二〇一六）『国冬本源氏物語論』武蔵野書院
五島和代（一九八六）「河内本源氏物語と国冬本―常夏巻の場合―」『北九州大学文学部紀要』三六
斎藤達哉（二〇一三）「米国議会図書館蔵『源氏物語』について―書誌と表記の特徴―」『国立国語研究所論集』六
――（二〇一四）「語の表記における仮名字体の「偏り」と「揺れ―米国議会図書館蔵源氏物語写本の「ケハヒ」と「カタハライタシ」の表記―」（小山利彦編（二〇一四）『王朝を彩る軌跡』（武蔵野書院）所収）
渋谷栄一（二〇〇七）平安末期における「源氏物語」の抄出書写―国宝『源氏物語絵巻』絵詞と藤原伊行『源氏釈』抄出本文を中心として―」『日本文学論究』六六
――（二〇〇八）「国宝『源氏物語絵巻』「竹河」の表現世界について」（横井孝・久下裕利編『源氏物語の新研究―本文と表現を考える』（新典社）所収）
関一雄（二〇〇〇）「『源氏物語絵巻』詞書の用語と表現―『源氏物語』本文との対比による国語学的考察―」『日本文学研究』三五
高田智和・斎藤達哉（二〇一三）『米国議会図書館蔵『源氏物語』について―書誌と表記の特徴』『国立国語研究所論集』六
竹部歩美（二〇一五）「国宝『源氏物語絵巻』詞書の仮名表記について―読解上の問題点と変体仮名の運用―」『言語の研究』一

中川美和（一九九五）「『平安遺文』における語中・語尾のハ行音ほかの平仮名表記について」『都大論究』三
中村一夫（二〇一四）「仮名文テキストの文字遣―語と表記の関係」（豊島秀範編『源氏物語本文のデータ化と新提言』三（國學院大學文学部豊島研究室）所収）
中村義雄（一九五四）「源氏物語絵巻の詞書について」『美術研究』一七四
――（一九五四）「源氏物語絵巻詞書　附原典諸本との異文校合」『美術研究』一七四
――（一九八二）『絵巻詞書の研究』角川書店
飛田良文・遠藤好英・加藤正信・佐藤武義・蜂谷清人・前田富祺編（二〇〇七）『日本語学研究事典』明治書院
矢田勉（一九九五）「異体がなの使い分けの発生」『築島裕博士古稀記念国語学論集』汲古書院（矢田勉（二〇一二）『国語文字・表記史の研究』（汲古書院）所収）

付記

資料の閲覧と掲載を御許可くださった天理大学附属天理図書館に記して感謝申し上あげる。なお、本稿は平成二八年度科学研究費補助金学術研究助成基金助成金（基盤研究C）による研究課題「『源氏物語』写本との比較から見た国宝『源氏物語絵巻』詞書の日本語学的研究」（課題番号16K02731）の研究成果の一部である。